



発問を中心とした考える力を養う地理授業：「太平洋の島々」における実践

小河，文雄

(Citation)

兵庫地理, 41:63-72

(Issue Date)

1996-03-31

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002409>



発問を中心とした考える力を養う地理授業

— 「太平洋の島々」における実践 —

小 河 文 雄

1 はじめに

周知のように、平成元年版学習指導要領は新しい学力観に立った能力の育成を目指している。新しい学力観とは、自ら学ぶ意欲や能力、思考力、判断力、表現力などを学力の基本とするものである。そして高等学校では地理Aと地理Bという新科目が登場し、新しい学力観に立った地理授業の創造が叫ばれ、すでに地理教育関係者によって様々な授業の工夫やアイデアが生み出され発表されてきた¹⁾。

これらの工夫やアイデアを年間の授業の中に取り込むのもよいだろう。しかし毎回の授業に対して特別な準備をすることは、学級経営や部活動等を考えると難しいし長続きしないものである。それも大切だが、多くの教師が一般的に行っているであろう教科書を活用した授業について、点検し直すことがより重要だと考える。

兵庫教育大学教授の岩田一彦先生は「私の手元に届く高校の先生方の授業指導案には指導案の体をなしていないものも多い」と指摘する。すなわち「指導案に不可欠な『教師の発問』と『予想される生徒の答え』さらにそれから発展する『問い』を解決するという問題解決学習のプロセスが描かれていない授業指導案が多い」としている²⁾。

この言葉には反省させられた。筆者は今まで「教師の発問」についてあまり深く考えずに授業をしてきた。1回の授業について思いつきのような発問を数回する程度で、受験指導という名のもとに知識注入に時間を費やしてきたのである。

問題解決学習の実施については、トレーニングできていない筆者にはまだ難しい。また

受験ということを考えると、限られた時間内である程度の知識を教えることは欠かせない。そこで各種の発問を平素の授業の中に計画的に組み込むことによって、生徒を主体とし、生徒が自ら考える力を養えるような授業に一步でも近づけないだろうかと考え、平成7年11月、「太平洋の島々」という研究授業を校内で実施した。

2 地理学習指導案

(1) 対象 3年1組(理系男子40名)

3年5組(理系男子40名)

3年9・10組(文系女子23名)

研究授業は5組と9・10組で実施した。

(2) 単元 太平洋の島々

(3) 指導計画(3時間)

① 太平洋の島々の概要とパラオ共和国について理解させる …2時間

② NHK特集「ミクロネシア」を視聴して自分の考えをまとめる …1時間

(4) 使用教材等

- ・教科書『高校地理世界の諸地域初訂版』(帝国書院)
- ・地図帳『新詳高等社会科地図五訂版』(帝国書院)
- ・オセアニア州の掛図と付箋
- ・実物のココヤシとコブラ、コブラを原料とする石けんや洗剤
- ・写真「南太平洋の島の食事」(地理・地図資料1992年3月号)
- ・写真「ナウルのリン鉱石採掘、ニューカレドニアのニッケル工場」(週刊朝日百科世界の地理89号)
- ・プリント「パラオ共和国独立の記事」

(朝日新聞1994年10月1日夕刊)

- ・視聴覚教材「ミクロネシア～核戦略に揺

(5) 学習指導過程

① 第1時

れる楽園」(NHK特集1987年放送)

- ・ビデオ視聴時の問題用紙

	学習活動及び学習内容	指導上の留意点
導入 10分	・太平洋の島々（ここではオーストラリアとニュージーランドを除くオセアニアを指す。以下同じ）の位置を確認する。 《発問1》太平洋の島々について知っていることをひとことで答えなさい。 《発問2》現在、太平洋の島々には多くの独立国がありますが、その中でAPECに参加している国を挙げなさい。 (答：パプアニューギニア) 《発問3》現在フランスが核実験を行っているのは何島で、太平洋のどの辺りにありますか。 (答：ムルロア環礁、南東太平洋)	・掛図で確認する。地域区分までは触れず、簡単に位置を確認する程度ですます。 ・次々と当てることによって、できるだけ多くの生徒から聞き出す（以下の質問も同じ）。 ・この地域に対して、「観光地」「楽園」「珊瑚礁」といった程度の知識しか持っていないことに気づかせる。 ・APEC大阪会議の直後ということでこのような発問をする。APECという名称にもかかわらず、1か国しか加盟していない現実注目させる。 ・ムルロア環礁は知っていても、位置については知らないことに気づかせる。 ・以上の発問によって、太平洋の島々に対する生徒の興味関心を高めていく。
展開 35分	・太平洋の島々について概説する。 (1) 三つの地域（文化的身体的特徴で区分） メラネシア（黒い島々）… 例 アボリジニー ポリネシア（多くの島々）… 例 マオリ 《発問4》日本で活躍しているポリネシア人の名前をあげなさい。 (答：小錦, 曙, 武蔵丸, ラトウなど) ミクロネシア（小さな島々）… ポリネシアに類似 (2) 自然 気候…熱帯雨林気候, 赤道低圧帯, 貿易風帯	・以下、板書しつつ進める。 ・地域区分図を板書する。 ・アボリジニーは教科書の写真で確認する。 ・相撲やラグビーで活躍している人々からポリネシア人の身体的特徴を把握させる。 ・自然については深入りせず、すでに学習したことを使って述べる程度にとどめる。

	地形 … 陸島（環太平洋造山帯，ニューギニア島やマリアナ諸島など） 海島（火山島と環礁，ハワイ諸島やムルロア環礁など） 《発問5》一般的にいて火山島は環礁よりも生活しやすいのですが，その理由を考えなさい。 （答：火山島のほうが土壌が豊かで水が得やすいので） (3) 伝統的生活様式 《発問6》太平洋の島々の代表的作物を挙げなさい。 （答：タロイモ，ヤムイモ，ココヤシ） 焼畑農業等 … ヤムイモ，タロイモ，バナナなどを掘り棒で耕作 樹木作物採取 … ココヤシ（コプラは商品作物として重要），パンの木など 《発問7》コプラを原料とする製品（商品）を挙げなさい。 （答：石けん，洗剤，ココナツ，「ナタデココ」など） 漁業 … アウトリガーカヌー，各種の伝統漁法 《発問8》人々の伝統的な料理の方法について説明しなさい。 （答：石蒸し焼き料理について述べる）	・地名は常に掛図で指し示すとともに，地図帳で確認させる（以下同じ）。 ・環礁も海底に火山があることを教科書の珊瑚礁模式図で確認しておく。 ・やや難しい発問だが，火山島と環礁の自然条件の違いから考えさせる。太平洋の小島の厳しい自然について理解させる。 ・タロイモやヤムイモなどは世界の農業のところで学習済みであり，易しい発問である。 ・教科書の写真でヤムイモとタロイモ，ココヤシを確認する。 ・コプラからできた石けんと洗剤を見せ，コプラが身近な存在であることを理解させる。 ・ココヤシとコプラを回覧し，実物に触れさせる。 ・教科書の図でココヤシの利用法を確認し，「生命の木」といわれる理由を理解させる。 ・アウトリガーカヌーは黒板に図示し理解させる。 ・石蒸し焼き料理の写真を回覧する。 ・石蒸し焼き料理は栄養的に優れており，燃料や調理用具としても自然をうまく活用していることを理解させる。
まとめ 5分	・本時の学習のまとめと次回の予告をする。	・特に，伝統的生活様式が自然を巧みに活用したものであったことを確認し，次回はそれが現代までにどのように変化したかを学習すると予告する。

② 第2時

	学習活動及び学習内容	指導上の留意点
導入 5分	・前回の学習のまとめと本時の学習の概要を説明する。	・掛図を利用し簡単にすませる。
展開 45分	・太平洋の島々の概説を続ける。 (4) 歴史 16世紀 → 17世紀 → 18世紀 → 19世紀 スペイン オランダ 英仏 分割競争 (5) 現状 《発問9》現在、太平洋の島々には独立国がいくつあると思いますか。 (答：12か国) 1962年西サモア独立（NZ信託統治領） ↓ 1994年パラオ独立（米信託統治領） パプアニューギニアを除く11か国 …面積6.45万km²，人口174万人 《発問10》12の独立国で最も一般的な言語と宗教を答えなさい。 (答：英語，キリスト教) すべて英米豪NZからの独立国 → 欧米的生活様式が一般化 消費財の多くを輸入 → 大幅な貿易赤字に → 旧宗主国の経済援助に依存 《発問11》ナウルは12か国の中で1人当たりGNPが最高（89年約1万ドル）ですが、それは何という資源によるのでしょうか。 (答：レアノという燐鉱石) その他重要な輸出品の例	・歴史は概略にとどめる。 ・各国が主にどの地域を領有したかを黒板に図示する。 ・最初は地図帳などを見ずに答えさせる。数人に尋ねた後、地図帳で確認させる。独立国が12もあることに注目させる。 ・掛図上の12か国のところに付箋（メラネシアは黒色，ポリネシアは赤色，ミクロネシアは黄色）をつけて全員で確認する。 ・北海道の面積（7.8万km²）や神戸市の人口（148万人）と比較し理解させる。 ・欧米による植民地支配から考えさせる。過去の伝統的生活様式と現在の生活様式の違いに注目させる。 ・地図帳の統計で確認させる。国によって国民所得や貿易額にかなりの差があることに気づかせる。 ・例外としてナウルを取り上げる。レアノとは海鳥の糞が堆積してできたもので、オーストラリアやニュージーランドの農業の発展に貢献してきたことを述べる。 ・ナウルの燐鉱石採取の写真を見せ、今世紀中に資源の枯渇が予想される点に注意させる。

	フィジーの砂糖（インド系移民が労働力） ニューカレドニアのニッケル鉱（仏領） パプアニューギニアの銅鉱と木材（日本へ輸出） ・パラオ共和国について説明する。 《発問12》一般にパラオの高齢者は英語以外に何語を話せるでしょうか。またそれはなぜでしょうか。 （答：日本語，日本統治時代の日本語教育による） (1) スペイン統治時代 → ドイツ統治時代 → 日本統治時代 → アメリカ統治時代 → 1994年独立 《発問13》現在パラオの多くの人々は、各時代を比較して、どの国の統治がよいものと考えていると思いますか。またそれはなぜでしょうか。 （答：日本，アメリカのズーセオリーと比較して説明する） 《発問14》一般にパラオの人々の主食と副食，調理時の燃料はなんでしょうか。 （答：米と缶詰，石油） (2) アメリカの経済援助と非核憲法の凍結	・ニューカレドニアのニッケル工場やフィジーのさとうきび畑の写真を見せる。 ・各国と，旧宗主国や日本との関係について簡単に述べる。 ・パラオ共和国を事例として，太平洋の島々の現状と問題点を理解させる。 ・パラオ支配の歴史から考えさせる。戦前，日本はミクロネシアを南洋群島と呼び，パラオの首都コロールには南洋庁が置かれていたと述べる。 ・国名はクイズ的な発問であるから，多くの生徒に答えさせる。 ・各時代の統治の特徴を簡単に説明する。特にアメリカの行ってきたズーセオリー（動物園政策）について述べる。 ・パラオの歴史やアメリカのズーセオリーから考えさせる。米食の習慣は日本統治時代に定着したものであり，米・缶詰・石油とも，アメリカの援助に頼っていることを述べる。 ・パラオ独立時の新聞記事を配布し，読ませる。非核憲法を凍結し，軍事防衛権を委譲してでも経済援助を必要とするパラオの国情を理解させる。
まとめ 5分	・本時のまとめと次回の予告などをする。 ・まとめとして，太平洋の島々の経済的自立が容易ではないことを述べ，経済的自立の方策を各自で考えるように指示する。次回は視聴覚室でNHK特集「ミクロネシア」を見ると予告する（授業の用意も持参）。	

③ 第3時

	学習活動及び学習内容	指導上の留意点
導入 10分	問題用紙を配布し、本時の学習の概要を説明する。	- 視聴覚室にて行う。 - これから視聴するNHK特集「ミクロネシア」について掛図で簡単に説明し、ビデオを見ながら問題を解くよう指示する。
展開 35分	ビデオを見ながら問題に答える。 問題用紙の内容 《問1》プルワトの人々が利用している船を何といいますか。 (答：アウトリガーカヌー) 《問2》タロイモは島のどこに植えられていますか。 (答：島中央の湿地帯) 《問3》現地語でチープネグ（パンノキの実）とはどのような意味ですか。 (答：子どもよ泣くのはおよし) 《問4》現在プルワトはどのような問題を抱えていますか。 (答：人口増加による慢性的食料不足) 《問5》イバイの人口は何人で、そのうち基地労働者は何％ですか。 (答：8000人以上、8％) 《問6》イバイの海がきわめて汚染されているのはなぜですか。 (答：下水道が全く整備されていないため) 《問7》最近イバイで増加している疾病は何ですか。 (答：成人病やチフスなどの伝染病)	「ミクロネシア」は45分番組だが、伝統的生活が残るプルワト島と米軍基地労働者が住むイバイ島との対比が鮮やかな前半部分（約25分）を見せる。 - 生徒をビデオに集中させるため、問題用紙を用意した。各問題はビデオ視聴を妨げない程度の簡単な内容にしてある。
	太平洋の島々が生きる道としてはどのようなものが望ましいか、また日本はどのような援助ができるかについて自分の意見をまとめる。	最後のまとめとして、10分程度で各自の考えを問題用紙の余白にまとめる。
まとめ 5分	問題用紙を回収し、次回の予告をする。	時間内で自分の考えをまとめきれなかった者は次回の授業で提出するように指示する。

米に軍事移管 懸念残し船出

パラオ共和国独立



非核憲法を凍結

【コロール（パラオ）1日＝鈴木健】国連による世界で最後の信託統治領だったパラオ共和国は一日午後一時一分（日本時間同）、信託統治していた米国との「自由連合協定」が発効し、独立した。パラオは核兵器の使用を禁じた非核憲法を持っているが、経済援助と引き換えに米国に軍事・防衛権を移管することに伴って、非核案項を凍結した。しかし、住民の間には反核、反軍事基地化の意識がまだ根強く残っている。

パラオは自由連合国として独立したことにより、自

治権、外交権を獲得した

る。自由連合協定承認をめぐ

が、米国から十五年間で総額約四億五千万ドルの経済援助を受けるかわりに、核の使用、貯蔵、処分を全面禁止した世界でも厳格な憲法の非核案項を凍結し、軍事・防衛権を米国に移管することになった八回目の住民投票で

パラオ共和国 太平洋の二百余りの小さな島々からなり、面積は約五百平方キロメートル、人口は約一万五千人。観光と小規模な漁業が主な収入源だ。日本の統治を経て、一九四七年から国連の米信託統治領。八一年、自治政府が発足。クニオ・ナカムラ大統領の父親は三重県出身。

ようやく承認された。

自由連合協定承認が難航したのは、住民の間に根強く反核、反軍事基地化の意識が残っているからだ。経済援助と引き換えに、今後五十年間という長期にわたる、同国での基地建設や、核搭載艦船の入港も可能になることから、いまだに反対意識は強く、協定反対の訴訟も相次いでいる。反対運動を続けているガブリナ・ニールマンさんも「この状態は本当の独立ではない」と批判している。これに対してナカムラ大統領は「クリストファー米国防長官から、有事の時は、パラオが防衛を依頼した時、米国は軍事力を行使しないことを確認している」と説明している。

独立記念式典に参列したネグロポンテ駐フィリピン米国大使も「現在、いかなる基地を造る計画もない。東南アジア太平洋地域の焦

点には経済発展であり、将来太平洋地域で軍事的イニシアチブをとる考えはない」と話しているが、冷戦構造が崩壊し、フィリピンからの基地撤退、グアムの兵力削減など太平洋地域からの軍事撤退が相次いでいる米国は、将来に備えてパラオを基地とする場所として確保したことになる。

大統領が独立宣言

【コロール（パラオ）1

日＝鈴木健】パラオ共和国のクニオ・ナカムラ大統領は一日午後、首都コロールの球場で行われた独立記念式典で、「きょうパラオは信託統治という安全な港から、国際社会の新しい家族の一員として旅立つ。我々は国際社会との関係を進展、強化させたい」と独立を宣言した。「我々は我々の決断と結果に責任をもたなければならない」と決意を表明した。



授業風景（ココやしとコプラを手にした生徒）

3 授業の考察

本授業は、従来の授業の中に発問を計画的に組み込むことによって、教師主体の知識伝達型の授業から生徒主体の考える授業に少しでも近づくことをねらいとしたものである。よってここでは発問を中心に授業について振り返り、課題などをまとめておく。

第一に、考えさせる発問作りの難しさということである。いったい「考える」とはどういうことを意味するのだろうか。伊東亮三氏は次のように定義している³⁾。

「ほんらい『考える』『思考する』というはたらきは2つの意味をもっている。第一の意味は、事実、事象を見たり聞いたりしたことから簡単なことを知ること、すなわち簡単な知識をうることで、それを知覚による『判断』といい、その判断の結果を命題とか情報という。…略…『考える』ことの第二の意味は、いろいろな知識や情報の間にどんな関係がなり立つかを見つけることであって、これを『推理』という。それはいろいろな判断を前提として、それから新しい判断を結論として導き出す思考の形式である。」

この区分を採ると、関係の『推理』といえるのは5・10・12・13・14の5問であり、それ以外は知覚による『判断』のレベルにある

といえる。生徒の考える力を養成する授業を目指すならば、1時間の授業の中に関係の『推理』となる適切な発問を数題は配置することが必要不可欠である。また、その場の思つきでこのような発問をすることは難しく、事前に十分な準備が欠かせない。

第二は、発問を用意する際に、ヒントまで十分考えておく必要がある。発問を組み込んだ授業は、やたらと時間がかかってしまう。発問が知覚による『判断』に該当するような簡単な場合はともかく、

関係の『推理』の力を要求するような難しい発問となると、正解は簡単には出てこない。本授業でも上記の5問は生徒にとって難しく、時間の都合で筆者が答えてしまった場合もあった。

しかしこのような難しい発問の場合でも、教師が簡単に正解を与えてしまうのではなく、できるだけ生徒に正解を答えさせたい。そのためには、正解に導くような適切なヒントを生徒に与えていくことが必要である。難しい発問に答えることができた時、生徒の喜びは大きく、授業に対する意欲や関心は高まっていく。今回の授業では、ただ単に発問を用意するだけではいけないことを痛感した。

第三に、いきなり本題に入ったり、または教師による一方的な導入をするよりも、適切な発問による導入がその後の展開に非常に有効である。

先に発問5・10・12・13・14以外は知覚による『判断』に該当すると述べたが、その中で発問1～3などは、授業の導入としてかなり有効だったと思う。発問1に対する生徒の答えは、グアム・タヒチなど＝珊瑚礁に囲まれた南海の楽園、のような観光案内書レベルのものが多かった。またAPEC加盟国やムルロア環礁の位置となると、当時大きな話題

となっていたにもかかわらず、ほとんど正解はない有様で、生徒に太平洋のことをほとんど知らないことを強く認識させることができた。これによって授業に対する生徒の興味関心が相当高まったように思う。

そして第四に、発問を中心とする授業に対する生徒の評価は概ね好評であったことである。3時間の授業の後、生徒全員に感想を書かせてみたところ、一部に次のような内容がみられた。

「とても密度の濃い授業でおもしろかったけど、ずっとあんなのだったらしんどいだろうと思った。」

「生徒に発表させていたが、むしろ普通の授業でもいいと思った。」

彼らは、授業中、常に指名されるかもしれないという緊張感で疲れてしまったようだ。だが、これは生徒の側に問題があるのではなく、平素から講義調の一方通行的授業をしてきた筆者の責任といえる。ひたすらノートをとるような授業を受けてきたため、一部の生徒は考えることを要求される授業に面食らってしまったのだろう。

大多数の感想を集約すると次のようなことになった。

「クイズ形式（筆者注：授業では、生徒をリラックスさせようという意図から、発問といわずクイズと呼んでいた）だと、頭に残りやすくなります。ただノートをとって覚えるよりも、『自分で考える』というのがいいのだと思います。」

「ぼくは発表する機会はなかったけど、先生が質問するたびに、その都度自分で意見を考えたつもりなので、とても集中して授業を受けることができた。ちょっとクイズが難しすぎて手が出なかったけど。」

生徒は自ら考え、発表できるような授業を望んでいることが明らかである。そのためには、コンピュータの使用など新しい教授方法の開発も大切ではあるが、発問というオーソ

ドックスで基本的な手法を高等学校の授業の中でもっと見直していくべきである。

さて、授業で発問以外に有効だった実物教材と掛図及び写真の回覧について記しておこう。

実物教材としては、ココヤシとコブラが強く生徒の関心を引いたようだ。

「実際にコブラをさわれてとても印象深い。缶詰に入ったものは漏れてベタベタしてたけどそれは缶の製法が悪いからとわかった。」

たぶんこの生徒はコブラを使った地理授業を忘れることはないだろう。どこにでもある物は別として、珍しい実物教材については、できるだけ收拾しておく必要性を感じた。なお、ココヤシとコブラなどは、本校理科教諭の北村也寸志先生から拝借したものである。ここに記して御礼申し上げます。

掛図は普段の授業でも常に活用しており、地理の授業には欠かせないものである。今回は地図上に色別の付箋を付けてみた。これによってポリネシア・メラネシア・ミクロネシアの12か国を太平洋上に識別することができた。実に簡単な工夫だが、視覚的効果は大きかったと思う。

写真（雑誌などに掲載されているもの）については、教壇上から見せるだけでなく、いつも全生徒に回覧するようにしている。回覧すると雑誌や本はどうしても痛むし、効果があるのだろうかという疑問もあった。しかし生徒の感想の中に次のようなものが何点あった。

「研究授業だけに限らず、いつもの授業のときもだけど、よく資料とか写真のついているのとかを回してくれるのがすごく好きです。」

実物教材と同様、写真も生徒ひとりひとりが手にとってじっくり眺めるようにすることが効果的であると再認識した。

4 おわりに

この授業は旧学習指導要領による第3学年

地理（4単位）の3クラスで行った。新学習指導要領が実施されている第2学年地理で行わなかったのは、筆者がそれを担当していなかったからである。また、計3時間の指導計画のうち、研究授業として公開したのは第1時である。

当初、参観者に対して用意したのは、「研究授業メモ」という名前の簡単なレジュメであった。本稿を作成するにあたり、再度授業内容を検討し直し、修正を加え、できるだけ詳しい指導案を作成した。指導案の書き方が未熟なため、解りづらいところが多いと思うが、読者諸氏に多くのご批判をいただき、少

しでも自分の授業を上達させていきたいと考える。

最後に、このような研究授業の実践を思い立ったのは、平成7年9月、兵庫県立教育研修所での高等学校地理歴史科（地理）教育講座を受講した際、兵庫県教育委員会指導主事の藤本雄史先生や兵庫教育大学教授の藤井宏志先生の講義を拝聴し、大いに啓発されたことがきっかけである。とくに、藤井先生の講義「南海の楽園パラオの国際化」からは、発問を中心とする授業の構想や、発問12～14などパラオ共和国について貴重なご教示を戴いた。記してお二人に厚く御礼申し上げます。

注

- 1) 例えば、澁澤文隆ほか（1994）『新高校地理授業の工夫とアイデア』。古今書院、252p.
- 2) 平成6年度西部地区高等学校地理歴史科・公民科研修講座 地理分科会報告。兵庫地理、40、p.75.
- 3) 伊東亮三ほか（1982）『達成目標を明確にした社会科授業改造入門』。明治図書、pp.35-36.

参考文献

- 岩田一彦ほか（1984）『地理教科書を活用したわかる授業の創造』。明治図書、170p.
- 大島襄二ほか（1992）『特集太平洋の島－日本とのつながり』。地理、37-7、pp.16-49.
- 太田陽子ほか（1985）『ニュージーランド・太平洋諸国』。週刊朝日百科世界の地理、9、pp.225-252.
- カンパ ランド（1972）『南西太平洋』。朝倉書店、459p.
- 鈴木健二（1989）『社会科指導案づくりの上達法』。明治図書、206p.
- 山比浜省吾ほか（1991）『新訂オセアニア』。大明堂、292p.

（おごう ふみお・兵庫県立宝塚東高校）